



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 日本人にとっての第一次世界大戦

講演：板谷 敏彦氏
レポーター：赤堀 薫里

板谷 敏彦氏 経歴

西宮市生まれ、関西学院大学経済学部卒業。IHI(船舶部門)を経て証券業界へ。日興証券NY、機関投資家営業、クレディ・アグリコル・インドスエズおよびドレスナー・クラインオート・ワッサーズ・タイムでマネージング・ディレクター。みずほ証券株式本部営業統括。2006年にヘッジ・ファンド設立。現在は作家に専念。

船舶全般/国内外株式/デリバティブス/ストラクチャー/投資ストラテジー/投資理論/金融史に強みがある。現在、小説高橋是清「コレキヨ」(週刊エコノミスト)、読書万卷(週刊新潮)、「高論卓説」(フジサンケイ・ビジネスアイ)連載中。

著作

『日露戦争、資金調達の違い-高橋是清と欧米バンカー達』新潮選書、2012年

『金融の世界史-バブルと戦争と株式市場』新潮選書、2013年

上記中国語版『世界金融史:泡沫、戦争与股票市场』:机械工业出版社、2018年

『日本人のための第一次世界大戦史』毎日新聞出版、2017年

共同翻訳に『プログラム・トレーディング入門』日本経済新聞社、1989年

現代との歴史的な類似性として経済史では、「トゥキュディデスの罠」ということが言われています。古代ギリシャの戦史を書いたのがトゥキュディデスです。スパルタが覇権を持っている時にアテネが勃興してきた。徐々に圧力を感じはじめたのがスパルタです。このような時は、戦争が勃興しやすいという事例を書いたモノです。台頭する国家は自国の権利を強く意識し、より大きな影響力(利益)と敬意(名誉)を求めるようになる。過去500年のうちでこうしたケースは16回あり、そのうち12回は大きな戦争になりました。直近にあったのが第一次世界大戦です。

習近平は「中国の夢」として中華民族の偉大なる復興を掲げています。中国人は世界中どこへいっても影響力を持ち尊敬される立場になるべきだ。中国は影響力と権力を求めるようになる。キンドルバーガーという金融恐慌の歴史を書いた経済史の先生が、「キンドルバーガーの罠」を提唱しています。「トゥキュディデスの罠」と並行してよく言われるのですが、第一次世界大戦が終わっ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

た後、アメリカが覇権を持っているにもかかわらず、国際連盟に加入せず、世界の面倒をみることを拒否したので、第2次世界大戦へとつながったというのが、「キンドルバーガーの罠」です。

今回もこのようなことが起こるのか。アメリカのトランプは「アメリカファースト。世界は知らない！」と言ったばかりに、にわかになら「キンドルバーガーの罠」だと注目されました。もう一つは中国が、インド洋地域で覇権を握っているにもかかわらず面倒を見なかった。「お金を貸したから港をよこせ」と言っている。こんなことをやっていると、また戦争の火種になる。これが第一次世界大戦と似ているという意味ですね。



もう一つは第一次世界大戦のころ、グローバリゼーションが進んでいたということです。蒸気船ができて、新聞は手刷りからロールペーパーになり自動印刷で、何万部も印刷ができるようになった。配布できる数が大きく異なってきた。蒸気機関車ができると、朝、駅で新聞を買えるようになる。ロンドンの近郊では100万部の新聞が刷られる。100万部なんて配達できませんからね。しかし、駅に置いておけば売れる。影響力をもったマスメディアがこの時登場してきた。電信によって同じニュースが世界中どこでも見られるようになった。クリミア戦争から日露戦争の時も同様に新聞を刷れるようになってきた。

この頃作られたのが、国民国家意識です。鉄道で大儲けした人は、ものすごい金持ちになり、穀物の相対的価値は、工業製品に比べてどんどん落ちてきます。農家はどんどん貧乏になる。格差が広がったのがこの時代です。トマ・ピケティが21世紀の資本論を書きましたが、世界で格差が広がっています。トランプが世界中で景気が良いと言っていますが、世界中で格差が広がっています。日本もアベノミクスで「景気が良い！」という人もいますが、非正規で入社した若者はそのままで。格差と不満がどんどん国内で累積しているということは事実ですね。

小野塚先生は、第一次世界大戦の開戦原因の中に「活発な経済成長の中に、富の蓄積にも関わらず不満を持っていた人が世界中にいたことが第一次世界大戦につながったのではないか」という仮説を立てておられます。この仮説は今につながっています。いわゆる国際分業と群集心理とリーカードの比較優位。国際分業が引き起こされる中でそれぞれの国々に残された人々、つまり低賃金で働く人がでてきてしまう。そういう人達が常に不満を抱えていてポピュリズムに簡単に流されやすい。だから世界でけんかが起こって、調子のいい政治家の言うことを聞いてしまう。

中国は独裁者が出てきしまふ。トランプ大統領は批判もありますけど相変わらず人気がありますからね。もしかしたら戦争の危機が近づいているかもしれない。全体の結論として100年前に何が起きたのかちょっと知っておこうということです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

講演の後半では、日米開戦原因についての説明、歴史的知見として日本軍参戦、プロパガンダ戦争、終戦処理、ケインズの戦後処理について興味深いお話をしてくださいました。最後に、第一次世界大戦と株価について解説くださいました。ぜひ、板谷さんのご著書をお読みになってください。



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 板谷敏彦氏を迎えてのフリーディスカッション

座談会：、板谷 敏彦氏、参加者のみなさま
レポーター： 赤堀 薫里

参加者 | 僕らの世代は司馬遼太郎が好きです。司馬史観に影響を受けました。彼は、明治の時代はリアリズムが基本にありよかったけど、昭和に入るとおかしくなったと言っています。板谷さんの本を読むと、必ずしもそうではないのかなと感じます。つながっている中であったことではないかなと思います。

板谷 | 司馬遼太郎は日露戦争まで書いて、その後、書けるような人物が日本にいなくなってしまったという事で筆を置いた。その後、暗黒時代になってしまった。本がなくなってから50年経っています。誤解がいっぱいあります。今、高橋是清を書いています。2.26事件の直前に総選挙がありました。これは完全に自由主義者が勝っているのです。



軍国主義を支持している勢力が選挙で負けています。国民は選んでいない。ところがその後、日華事変がおこり、それを機に報道をシャットアウトした。それで、ゴロっと変わるのがメディアスタンスです。

勘違いしているのが、軍国主義が進んで、是清がその中で殺され悲劇の人になっているという見方です。また、高橋是清のような立派な人、日本の景気を世界に先駆けてよくしてくれたのに、そんな人をどうして殺したのかという見方もあります。これは貧富の格差がすごかったからです。景気が良いのは一部の人達の話です。2.26事件が発生した頃は、地方の農村の人達は、今日、明日、自分のお姉さんが売られていく状況です。その時、高橋是清は、「農家は自立してもらわないと困る」という発言をしました。また、当時のグラビアに高橋是清一家の華麗な生活が出てしまうわけです。農家は絶望しますよ。

参加者 | そういふところの息子が、皆将校になるわけですね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

- 岡本 | 高橋是清の豪勢な生活が目に見えるようになったというのは、メディアのおかげですね。同じように、中南米諸国の人達が、アメリカの生活をネットで見るできるようになった。ベルリンの壁が崩壊した時は、ビデオの影響が非常に大きかった。今まで西ドイツの人達は非常に悲惨な生活を送っていると教えられていたのが、ビデオの映像を見ると全然違っていきつかけになったという話もあります。メディアの役割がすごく大きく、それが歴史を動かすことになるのでしょうか。
- 問題は総選挙まで行われていながら、最終的に庶民の声と全然違う、軍というものに主導権をとらせてしまったところにどういう経緯があったのでしょうか。
- 板谷 | 反対だから、軍が強権を発揮した。それに妥協した政治家がいたということです。自分が当選したいから、間違っているけれどまあこの場はいいやということですね。今の与党と似ています。そういう積み重ねがゴロンとヒックリ返ってしまう。民主主義の宿命ですね。中国はそれをわかっています。どっちの統治がいいのか、中国人はだんだん民主主義よりも今のやり方の方が良いと考える若い人が増えてきているそうです。
- 参加者 | ペンス副大統領の発言ですが、トランプ大統領だからアメリカの方針が変わるのか、共和党から民主党になれば変わるのか、それとも大統領が替わっても政党が替わっても起こるべき基本路線の変化なのですか？
- 板谷 | あれは、トランプのせいではなく、アメリカのインテリジェンスの層の総意です。民主党になっても基本は大きく変わらないです。
- 参加者 | 習近平は、ものすごい野望を抱いているわけではないと思います。中国だってこれから人口がどんどん減っていくわけです。国力も今がピークに近いところにいるので、ここで勝負を打っておかなければいけないところが習近平の中にありますよね。
- 板谷 | そうですね。統治上の問題ですね。
- 参加者 | だから、アメリカも黙ってられないということになったのではないかなと思います。
- 板谷 | 独裁を引いたというのが引き金ですよ。
- 岡本 | 結局、日本だって、「窮鼠猫をかむ」じゃないけど、追い詰められた結果、あんなところがありますよね。皆、自国ファーストで、生き延びるためにしょうがないところですよ。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

- 板谷 | 満州がなければ日本は滅びると言いましたが、戦後繁栄していますよね。別に満州がないからというのは変な話です。
- 岡本 | 逆に、アメリカは勝ったから大変な負担を強いられていますよね。
- 板谷 | だから今、アメリカは、「嫌だ！」と言い出したわけですよ。「俺は知らん」と。そういう意味では似たような話が多いですよ。
- 参加者 | 結局、日本が第一次世界大戦に参戦したのも中国の利権の維持拡大、アメリカとの関係。今も極めて相似的なかたちになっています。どうしたらいいと思いますか。日本はアメリカについていくしかないのでしょうか。それともアメリカ、中国両方を見ながらバランスをとっていくのでしょうか。
- 板谷 | ついて行くとか行かないとか決めなくてもいいのではないのでしょうか。もっと柔軟になったほうがいい。是々非々でついていけば、結果としてついていくことになると思います。初めから中国へついていくという選択はないのではないのでしょうか。民主国家じゃないし。
- 参加者 | 日本はすごく有利な位置にいると思いますよ。ロシアとの関係を見ても、二島返還についていろいろ言っているけど、今年ロシアへ行ってつくづく思ったのは、絶対四島共に返ってこないですよ。もう一度ロシアと戦争して勝たない限り返ってこないですよ。どういう交渉をしているのか我々には見えないけど、2つでも返ってくるなら返してもらえばいいですよ。
- 板谷 | 返ってくるといってもロシア人住んでいるし、名前だけじゃないですか。今更あそこにミサイルを配備して日本になんの得があるのですか。それと中国が北極海の利権を狙い始めた。ロシアとしてはせめて日本と仲良くしておかないと。中国と日本が組んだら最悪じゃないですか。
- 参加者 | 日本は基本的にアメリカ陣営ですが、中国とロシアを手玉に取りながらでよいと思いますよ。
- 板谷 | アメリカが分断社会になってしまった。日本人と中国人が違うほど、アメリカ国内の人種間で色々な違いが目立つようになってきている。
- 岡本 | それは、いろいろな民族が入ってくれば当然そうなりますよね。北朝鮮と韓国が一緒になった場合、日本の地政学的な立場はどうなりますか。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

板谷 | 北朝鮮が核兵器を持ったまま統合された韓国ができてしまいます。人口的にはそろってくるのかな。20年30年後に収斂していくのかもしれませんが。北朝鮮の人口が増えますからね。

岡本 | かなり大きく変わってきますね。

板谷 | あの民族は特色が多いから。

参加者 | そういう意味ではEUに対するイギリスや、アジア大陸に対する日本の立ち位置は悪いですね。

参加者 | 何事もアメリカが支配しているというのが日本ということですか。

板谷 | 産業が依存していますからそれはしょうがないですよ。自動車の販売先がアメリカである以上しょうがないです。日本の株価指数は、アメリカの指数と為替で決まります。94%くらいの相関係数。世界中がアメリカ支配です。

参加者 | 日本が中国次第にならないでほしいですね。せめて。

板谷 | 中国次第でもあるわけです。

岡本 | そういう意味では、全部相互依存。

板谷 | トランプも最後まで言えない。

参加者 | 逆に統治者能力がない。

板谷 | ある程度、能力はあるのですよ。力の分だけある。番長じゃないからけんかを売ったりできないけど、横に意見は言うよね。

参加者 | 第一次世界大戦の前もグローバル化が進んで、相互依存で、戦争したってメリットがないと言っていながらなってしまう。今でもその通りなんですけど、どこに問題があるのか。何がネックなのかを考えておく必要がありますよね。

板谷 | どういう怒り方をするのか。核兵器が一番怖いわけです。一発撃ったら仕返ししますよ。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | そういう意味では第一次世界大戦と大きく違うのは兵器の発達。

板谷 | 戦争自体が、兵器の発達で大量の人間が死ぬ構造ができています。

参加者 | ヨーロッパや西洋にとってはどちらかというとなら第二次世界大戦よりも第一次世界大戦の方がインパクトのある戦争ですね。日本は戦後というとなら第二次世界大戦というイメージですね。

板谷 | 欧州で Great War というとなら第 1 次世界大戦ですよ。

参加者 | ちなみに第一次世界大戦は欧州大戦といいますよね。

岡本 | とても興味深い議論ができました。もっと我々、第一次世界大戦が起こった背景やその影響などについて知らなければいけないと痛感しました。ぜひ、板谷さんの著書をみなさんしっかり読んでください。ありがとうございました。